

ジャーミー（1492年没）は15世紀のイスラーム文化の一中心地、ヘラートで活躍した著名な知識人であり、詩人、ティムール朝宮廷人、ナクシュバンディー教団のスーフィー、神秘主義的世界観である存在一性論の思想家など多面的な顔をもつ。従来の研究は、詩人あるいは一性論者などの、彼の側面を取り上げて彼を評価しようとする傾向が強かった。これに対して、著者はジャーミーの個々の業績をその業績の属す分野の展開のなかで評価するという分析的手法をとらず、ひとりの知識人として15世紀ヘラートという場のなかで、神と被造物の関係を考察した上でどのように信仰を実践すべきか、彼のイスラーム像を探るという総合的な方法をとる。

本論文は本研究のねらいと先行研究を整理した前置きと4つの章と結論から成る。第1章で彼の時代の社会宗教的背景について、第2章で彼の学問と著作について論述する。第3章では存在一性論の優越性についての彼の主張を整理し、存在一性論は神学や哲学の個々の議論を否定するのではなく、むしろ包摂するのであり、そこでは神の一性について絶対的と統合的の2つの次元を考えることで、神の超越性を保持するとともに創造者として多なる被造物に関わることを可能にしたと彼の議論を評価する。第4章では一性論という理論がどのようにスーフィーの修行論と結びついているかを具体的に解明する。彼の実践面の議論は、ジャーミーの著した神秘家列伝の記述を通して一性論者が教団の師匠たちと霊的に結びついていること、教団の個々の実践や体験が一性論で理論的に支持されていること、大きくこの2点に特徴づけられると指摘する。

シャリーア遵守を強調するスンナ派のナクシュバンディー教団にあって、イスラームの実践は、教団独自のズィクル（神の想起）儀礼による内面の陶冶に裏付けられ、外面はスンナ派的な法規定を遵守する生活を送る、ということになる。この教団では、修行で得た深い体験を外に示さずに、それを保持しながら日常的な社会生活を営むことを重視しており、その意味で詩人として、宮廷人として社会的に活躍したこともナクシュバンディー的な実践のあり方として理解することができる。このように詩人としての、スーフィーとしての、一性論者としての、ジャーミーではなく、これらさまざまな活動のなかに一貫する彼の信仰の全体像を把握し、再評価しようとする試みであり、ユニークな視点を提供する論考になっている。

一性論のスコラ学的叙述の説明が分かりにくく、その提示にもう少し工夫が必要でなかったか、一性論と教団実践とのつながりをどのレベルで見ようとしているのかははっきりしていない、などいくつかの問題点が指摘されるが、ジャーミーという15世紀ヘラートのひとりの宗教的知識人に映じたイスラームを的確に描きだした点で、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に値するものと判断する。